

2017/9/3

テーマ「写真は何をするか?」

パネラー シム・チャンソプ(韓国江原道春川市在住写真家)

福島多暉夫(米子市在住写真家/米子市写真家協会顧問/JPA 理事)

川崎俊行(湯梨浜町在住写真家/倉吉市展審査員/JPA 会員)

R i n g e n(琴浦町在住写真家)

コーディネーター

計羽孝之(倉吉市在住版画家/倉吉文化団体協議会会長)

進行案

パネルディスカッションの目的について

倉吉文化団体協議会は、これまで韓国江原道芸総の写真作家と交流を重ねてきました。今年度は、江原道芸総写真家協会の沈昌燮(シム・チャンソプ)氏(韓国春川文人協会会長)をお招きし、倉文協所属の写真作家たち及び県内写真作家と、「写真は何をするか?」について意見交換会を行います。今回テーマとしますのは、風景写真であり、美しい自然を写真家の眼を通して新たな光景として捉える類の写真です。

現代の最先端写真界では写真家や美術家たちが現代美術の文脈で写真を制作し、多くの写真展が開催され、美術の一分野と認識されています。風景写真は、自然をあるがままに「撮る」時代から、写真家にしか見えない光景をエキセントリックに捉える時代へと推移して久しいものです。今回のパネルディスカッションは、シム・チャンソプ氏の静謐な写真をテーマにしながら、美しい自然を作り出す写真、作為的に自己主張する風景写真、現像ソフトを使い全く新しい光景を見せる写真等を考察し、写真は何を為すべきかについて語り合います。これらの問題は、現代写真表現を概観し、現代美術との関係性や写真表現の多元性を考えることで、現在進行形の写真表現の可能性を模索することになります。そして、鳥取県写真界で活躍する三人の作家と江原道芸総のシム氏を交えて、語り合い、写真作家としてのスタンスを見つめ直すのが交流の目的です。

① 基調提案⇒計羽孝之氏(倉吉文化団体協議会会長)

「風景写真の始まりから…現代」 (10 分間) Landing Time 10min
別紙資料参照

② パネラーの自己紹介⇒各自 3 分 (12 分間) Landing Time 22min

シム・チャンソプ氏(韓国江原道春川市在住写真作家) 画像 10 枚
福島多暉夫氏(米子市写真家協会会長) 画像 10 枚
川崎俊行氏(「赤いくつ」主宰) 画像 10 枚
Ringen(林原滋/フリーカメラマン) 画像 10 枚

③ パネルディスカッションの流れ

(1) 風景写真の変遷を見る⇒各自 5 分 (20 分) Landing Time 42min

・私の風景写真作法 パネラー/福島多暉夫氏
・私の風景写真作法 パネラー/川崎俊行氏
・私の風景写真作法 パネラー/Ringen 氏
・私の風景写真作法 パネラー/シム・チャンソプ氏

(2) テクノロジーを使い切る⇒各自 5 分 (20 分) Landing Time 62min

・現像ソフトを使いこなす パネラー/福島多暉夫氏
・フィルム写真でしか表現できない事 パネラー/川崎俊行氏
・ハイテク・ローテクを使いこなす パネラー/Ringen 氏
・デジタルカメラの利点 パネラー/シム・チャンソプ氏

(3) 風景写真の未来は何を目指すか?⇒各自 5 分(15 分) Landing Time 77min

- ・ 芸術する風景写真
 - ・ 自然を美しく切り取る
 - ・ 自然を見せたいように見せる
- (4) **まとめ**⇒シム・チャンソプ氏

パネラー/福島多暉夫氏

パネラー/川崎俊行氏

パネラー/Ringen 氏

(15分)

Landing Time 92min

基調提案

公益財団法人鳥取県国際交流財団山陰・夢みなと博覧会記念基金助成事業

日韓親善写真家交流事業 □基調提案 パネルディスカッション「風景写真の現在」

風景写真のはじまりから…現代

計羽孝之(倉吉文化団体協議会会長)

現代の風景写真は、作者の作風の乏しさや、個性が感じられないと言われて久しい。一般的に言われる風景写真は、ポスターや何かのパンフレット、カレンダーに使われる観光写真と言うか、絵葉書的なものが多かったのです。ところが、日本では風景写真をアートとして認識され始めたのは、北海道の富良野を撮ったあの「前田真三氏」から始まったと言っても過言でないでしょう。



更に、風景をダイナミックにトリミングする作風で一世を風靡した「竹内敏信氏」の新しい望遠レンズによる処方、日本に大きな流れを作ったものと認識している。つまり、観光写真的な作風から、私的表現としての作品作りに移行していったのです。出来るだけ他と異なった表現を目指すために、風景をドラマティックに捕え、強烈なインパクトを感じさせるもの、つまり強い個性を主張するものを目指しているのです。だから撮影のために納得いくまで通い続けて撮ったり、永い時間待機して風景が時とともに移ろい行く瞬間を見極めたりしているのです。美しい風景写真を撮るには、自分の求める風景が現れるまで、待つという忍耐が必要であったり、撮影が過酷であればあるほど、風景写真の醍醐味だと認識したりしているのです。しかし、シャッターを押せば、有るがままの自然を写し取ってしまうマジックのようなデジタル化の中で、今こそ、写真を撮ると言う目的を再確認しなければなりません。そして、他とは違うと言う視点を持つことと、意欲の有無が決定的な写真の要素となるのです。**何のためにそれを撮るのか、どんな表現を目指しているのか**を再確認しなければならないでしょう。

写真の創生と風景

写真が誕生したのは1839年8月19日、フランス学士院においてアラゴーとダゲールがダグレオタイプを発表した日とされています。**ダゲール**は風景画家であり、写真と絵画と

の密接な歴史の絡み合いがあるのです。

絵画の歴史に、風景絵画と言う様式は印象派以降だと認識しています。それまでは、物語の背景であり、絵画の中心テーマではなかったからです。

産業革命以後、経済的に成功した市民の中からプチブルと言われる富裕層が、王侯貴族の生活にあこがれ、パリの街並みに作られたマンションに住まうようになるのです。そして、芸術を愛好するパトロンになったりして貴族のスタンスを得たいと思うようになるのです。ところが本物の貴族たちは郊外に館を構え、広大な庭を有するお屋敷暮らしをしています。そこで、マンション暮らしのプチブルたちは、貴族たちの生活習慣を普通の生活に取り込もうと、窓から見えるはずの広大な庭や森、河川の流れなどの風景を描かせて壁に飾り、額縁越しの田園風景を楽しんだのです。こうした自然愛好の感情を沸かせたのは、産業革命以後の、近代化のスピードによって、ライフスタイルに変化を生じさせたからです。

そもそも、写真のスタートは、街の肖像画ブームから肖像写真に移行するところから始まったと言ってもいいのです。その後、イギリスのタルボット(ネガ=ポジ法の完成)は、自然の精密な観察と生命力豊かな自然現象をとらえることに専念するのです。当時のイギリスで著名な風景画家(ターナー等)(19C に支配的なジャンルとなる)たちの自然観を、写真家の眼として継承したのでしょう。

タルボットは1844年に、写真集「自然の鉛筆」を出版しています。彼は、写真とは、「**自然と言う創造物自らの手によって刻印されるイメージ**なのだ」と言っているのです。「写真とは、工学・科学的手段のみによって形成され、描出されるものだ。われわれは、ただそれを標本化するにすぎない。」と言っているが、一つの心理かも知れません。

風景写真を壮大なものにしたのは、旅行写真家たちであったのです。街では見られない遠く異国の風景を見たいと言う欲望によって、当時の人々が旅行しない限り見ることの出来ない驚愕の自然の光景、見たこともない動植物や建造物、異邦人たちの驚嘆に値する生活習慣など、**写真の裏側に居る写真家が体験した驚異や美の数々を写真に記録**し、当時のヨーロッパ人にジオグラフィックと言う白昼夢を見させて発展したのかもしれない。

1930年代の写真作家、ストランド、ウェストン、アダムスたちは、都市や時代ではなく、「自然」そのものに目を向け始めた。写真の「**機械の眼**」と「**自分の眼**」の共通や差異を確認し、新しい暗示的な精神作用を息衝かせたのです。写真の直接性や即物性を再発見し、写真と言う表現手段が様々に指摘されるであろう「**美の源泉**」を見つけ出し、自然の本質をあらわにさせたのです。**対象の外観の観察や物理的性質にもとづいて写真をとる習性**から、(対象をどう構成するかという**絵画的な考え方に支配されている**。)対象それ自体が、独自の時間を持っているなど、当時は誰も知るすべもなかったのです。**物理的物質からは見えない空気や光まで、幅広い要素の空間**があるなど知りもしなかったのでしょう。現代でも、知らない、知ろうとしない作家たちの存在は否定できません。そして、写真の持つ視覚性(平面性、瞬間性、レンズの特性、収差による遠近感、物質感など)こそが、今この時の現在性という「**時を刻む**」のです。そして、ピクトリアリズムのように、写真を絵画的に利用するのではなく、写真を**写真独自の特性にそって、写真家の心と密接に結び付くものを表出**するようになったのです。そして、投影された自分の内部にあるものを、光景として撮ろうとするのです。

「写真家は写真に自己の感情を刻み付ける創造者でなければならない」(ストランド)と言ったが、事物の存在をあらわす写真の直接性を信仰していたとも言えます。つまり、写真を撮るとき、カメラの前の被写体に対する自己の感情を意識しなくてはならないと言う事につきるのかもしれませんが。もっと言えば、作家固有の感性や思想の覚醒の手段であるべきであり、**人間の精神を写真と言う表現手段によって、目に見えるようにするもの**なのです。しかし、このような考え方は、スマホ全盛の現代では、苔むした概念になっている

のかもしれませんが。

ドキュメンタリーからフィクションへの広がりも、現代では当たり前になっているが、人為的な作品作りは、ストレイト写真を凌駕していることは確かなのです。カメラで撮られたイメージを、様々な現像処理操作でメタモルフォーゼさせているのが、現代なのかも知れません。

報告



2017.9.3 fL, パネルディスカッション記録



パネラーの皆さん



司会の計羽孝之氏



パネラーの林原氏、川崎氏、福島氏



ディスカッションに参加の皆さん



シム・チャンソプ氏



シム氏の自己紹介



シム氏の発言



福島氏の発言



林原氏の発言



川崎氏の発言



韓国江原道よりの鑑賞ツアーの皆さん5人でお出でいただきました。



ギャラリートーク シム氏

江原道芸総前会長のチェ・ジスン氏



鳥取の写真家池本氏のスタジオ訪問しての交流



個展会場の鑑賞者



琴浦町にて交流撮影会 道の駅にて



池本氏シム氏



神崎神社にて



鳥取砂丘で交流した中村健一氏



三徳山三仏寺にて撮影会交流 倉吉市の上田福美雄氏との交流



江原道芸総前館長チェ・ジスン氏一行の知事訪問



知事夫妻とジスン氏



上田正治写真美術館にて撮影交流



倉吉市展開会式に参加



写真の部審査員の川崎氏



倉吉博物館前 シム氏と計羽氏